

二〇一九年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたし（ヘガティールと呼ばれている）と麦くんはどちらも小学六年生。家も近所で幼馴染である。少しやんちゃなわたしと、おとなしめの麦くん。二人はいちばん仲の良い友だちだった。

麦くんとはこれまでときどきそうしていたように学校から一緒に帰って、途中にある公園のベンチに座ってあれこれと話をした。麦くんが描きかけている絵のことや、麦くんの身長がこの数か月のあいだに5センチも伸びたことについて話をした。

そんなことを話していると、公園の入り口あたりで女子が三人、こつちをちらちらみていることに気がついた。

三人とも制服のままだったけれど、帽子はかぶっていないかった。遠かったので最初は誰が誰だかわからなかったけれど、少しずつこつちに近づいてくるのをよくみてみると、それは麦くんのクラスの女の子たちだった。わたしがふだんちつとも話したりすることもない、廊下ですれちがっても目もあわせない、学年でちょっとだけ目立っているグループの女の子たちだった。

わたしはちらつと麦くんのほうをみた。麦くんも女の子たちに気がついてはるはずだけれど、とくに何も言わなかった。それでも明らかに空気が変わったのをわたしは感じていた。女の子たちはおしゃべりしながらわたしたちのほうに近づいてきて、それから少し離れたところにあるタイヤの遊具のあたりでまた立ち止まって、それでもわたしたちのほうをちらちらと眺めながら、何か言いたそうなそぶりをしているのだった。

しばらくすると、ベンチでならんで座っているわたしたちのところへやっぱり女の子たちはやってきて、そのなかのひとりがわたしのまえに立って、麦くんに話があるからちょっとどいてほしいんだけど、と言った。

わたしはべつにそのまま帰ってもちつとも困らなかつたのだけれど、その女子の言い方にかちんときたので、しばらく無視することにした。すると、きいてんの、話あるって言ってるじゃん、とまたべつのが言うので、そんなことはわたしは知らない、と言いつ返した。

言い返されると思っていなかったのか、三人とも驚いた顔をして、しばらく黙って、それから大声で笑いはじめた。そしてひとしきり笑い終わったあとで、真んなかのい

ちばん背の低い、最初に話しかけてきたリーダー^①みたいな女子が麦くんにもかかってこう言った。

「じゃ、麦くんがあっちに行ってくれる？ この子と話するわ」

麦くんのほうをみると、麦くんは固まったままびくりとも動かないで、うつむいたままじつと足下をみつめているのだった。

「いったい何なのかさっぱりわからないけれど、それは呼吸まで止めてるんじゃないかと思うくらい固まりっぷりで、とにかく麦くんがこの状況^{じょうきょう}にすぐくすぐく困っているということだけは伝わってくるのだった。

あっち行ってよ、というリーダーの強い声で、麦くんは固まったまま立ちあがり、そしてゆっくりと鉄棒のほうまで歩いて行った。鉄棒のわきでもやつぱり麦くんは固まったままだった。そのまま帰っちゃえばいいのに、とわたしは心のなかで思った。

「あのさ」とベンチに座ったままのわたしにむかって、リーダーが言った。

名札に書いてある名前をみて、知っているような気もしたけれど、でも話すのはまちがいなくこれが初めての女子

だった。

「麦くんとどうい関係なの？」

「えっ」わたしは驚いてききかえした。「なに、関係って」

「もしかして、付きあつてたりすんの」

「付きあつてないよ」

「じゃあ、なんでいつも一緒にいんの」

「いつも一緒にいないよ」わたしは反論した。

「家とか行ってるんでしょ」

「行つてないよ」

「嘘^{うそ}だよ。知ってるって。あんたいつても麦くんの家に行ってるんでしょ」

「ちがうよ、麦くんがわたしの家にくるんだよ」

「おなじじゃん」

「おなじじゃないよ」わたしは言った。「行くのと来るのじゃ大ちがいだよ。そもそも場所がちがうんだから。まったくちがう。あきらかにちがう」

するともうひとりの女子が、やつぱこの子へん、と小さな声でつぶやくのが聞こえた。

「とにかくさ」とリーダーがわたしをしっかりと睨^{にら}んで言った。そして後ろにいる、これまでほとんどしゃべらないで

立っていた三人目の女子を指さして言った。

「この子、麦くんと付きあつてるんだよね」

それを聞いた瞬間——本当はもうありえないくらいに驚いて、公園に生えている木がぜんぶびりびり震えて葉っぱがどっさり落ちてくるくらいいの **B** かと思つたけれど、わたしはなんとかこらえて、そうなんだ、とだけ答えた。

そしてリーダーは、そういうわけで、わたしと麦くんが仲良くしているのを見るとその女子がつかうてかわいそうで、だからわたしたちは大変に困っているのだと言つた。そして今後はその女子の気持ちを考えて麦くんとは距離をとるべきだ、と言うのだけれど、当たり前だけどそんな話はわたしにとってまったく納得できるものじゃなかった。でも、さっきの話があまりに衝撃的だったので、それについては何も言い返さないでおいた。

今の話がいったいなんでこんなに衝撃なんだろう——その考えをたどっていくと、どうやらその衝撃の根っこは、麦くんが、というところにあるのではなくて、付きあっている、というところにあるみだつた。誰かのことが好き、とかじゃもう、ないんだ。私たちの学年は、付きあう

とか、もう、そういうことになっているのだ。いや、なつていたのだ。そのことにわたしは衝撃をうけていたのだつた。

わたしが何の返事もなくなると、最初はぶつぶつと文句を言っていた女子たちも、しばらくすると公園から出て行つた。

わたしはベンチに座つたまま、ぼんやりとしていた。すると麦くんが鉄棒のところからもどつてきて、さっきとおなじようにわたしの隣に座つた。麦くんもわたしも何も話さないまま何分かがすぎた。麦くんは鼻の頭にいっぱい汗をかいていた。

「いまの子たち。麦くんと付きあつてるから、わたしにあんまり仲良くするなだつて」

わたしがそう言うと、麦くんは口をあけて、大きくため息をついた。そしておでこが膝にくつつくくらいに体をまるめると、それからまた動かなくなつてしまつた。

「ちよつと」とわたしは言つた。「なになに、なによ」

「……恐れていたことが」と麦くんはそのままの姿勢で言つた。

「なにが」

「……僕^{ぼく}としては事実無根なことなんだけど、でもいつか、こういうことになるんじゃないかとうすうす感じてはいて」

「なによ。っていうか、付きあうつてなに。どんな感じなの」

「だから、付きあつてはないんだけど」

「はあ」

「でも、付きあつてることには、させられてるっていうか」

「はあ」とわたしはいちおうあいづちをうつてはみたけれど、もちろん麦くんの言つてことはさっぱり訳がわからなかった。

「させられてるって、そんなことできるの」

「いや、できないんだけど」

「でも、できてるんでしょ」

「いや、麦くんはそこでやつと顔をあげて、また大きなめ息をついた。

話をきいてみると、まず、さっきの女子のうちのひとりが麦くんのことを好きになった。それで、ある日の放課後に麦くんがプールの裏に呼びだされたので行つてみると、

さっきの女子三人がいて、みんなのまえで告白をされた。

うん、とか、そう、とかなんとか言つて麦くんが帰ろうとすると、その女の子が泣きはじめてしまった。最初のほうは静かに泣いていたのだけれど、だんだん大声になつて途中からはそこらじゅうの草をぶちぶちむしりながら泣きつづけるので、麦くんはものすごくこわくなった。おどおどしながらどうすることもできずに立っていると、誰か好きな子がいるのかとリーダーがきいてきた。とくにいないと答えると、だったらこの子のことを好きになればいいと言つた。そんなの当たり前じゃないかというような顔でそんなことを言うリーダーに驚いた麦くんが、うまく答えられなくて黙っていると、だいたい勇気をふりしぼつて告白してくれた女子がこんなふう泣いているのをみてかわいそうだと思わないのかと問いつめてきた。そして、自分の今の態度がどれくらいひどいものだったのかについて反省して、自分の言葉でそれを説明するようにと言われた。呆然^{ぼうぜん}としている麦くんがそれでも何か反論するための言葉を必死で組みあわせていると、リーダーはにやにや笑いながら、しょうがないからとりあえず、わたしが解決してやると言うのだった。

こういう場合はとにかく付きあってみればいいのだ。とにかくそういうことになってしまえばいい、というのがリーダーの解決策だった。かたちから入るのが今はふつうだからと言って、麦くんの肩かたをばしんと叩たたいた。はい、今日から君はこの子と付きあってるんだからね。そういうことでオッケーね。わたしたちいつもみてるし、これから盛りあげていくためにいろいろ計画していくから。彼氏かれしと彼女かのじょってことで。泣いている女子にリーダーがそう言うと、その女子は泣くのをやめて麦くんをみて、えへへ、とかなんとか言はって恥はずかしそうに笑ったのだった。

「なにそれ」とわたしは思ったままのことを口にした。「なにそれ」

「わからないんだよ」麦くんは本当にわからないというような顔をして言いった。

「むちゃくちゃじゃん」

「むちゃくちゃだよ」

「なんか君、弱みをにぎられてるわけじゃないんだよね」

「弱みはあるんだろうけれど、べつににぎられてはいないと思う」

「麦くんの弱みってなによ」

「弱みっていうか、性格っていうか……」

「どんな弱みがあるの」

「……あれ、ねえ、っていうか弱みってそもそもどういう意味だっけ。わかんなくなってきた」

「知らないよ、わたしが麦くんに質問してるんだよ」

「そうだよね」麦くんは頼たよりなさげに肯ういた。

「とにかく、そんな話は誰がどう考えても、おかしいと思うんだけど」

「うん」

「おかしいところしかないから、どこから何を言いっていいのかわかんないレベル」

「うん」

「それで、麦くんは黙もったままだったの」

麦くんはわたしの質問にも黙もったまま、小さく肯うくだけだった。

^D「付きあうっていうのは、その、付きあってるんだ、ってことだけいいの」

「よくわからない」麦くんはこれまで聞いたこともないような暗い声で答こえた。

「そのことって、みんなに言いいふらされてたりするの」

「クラスはみんな知ってる」

「それはきついいね」

「うん」

「ほかに、どうしろとかこうしろとかはないの」

「今日あった」と麦くんはさらに暗い声で言った。「ヘガ
ティーに、ああしろこうしろって言った」

「なるほど」とわたしは肯いた。

「いったい……なんなんだろう」

麦くんは独り言みたいにつぶやいて、それからどうして
いいのかわからないというように背中をまるめた。

どこか遠くのほうでサイレンの音が鳴っていて、大きな
風がひとつ吹いてわたしたちの頭のうえを駆けぬけていっ
た。

なんだか空気が重たくなって、わたしは麦くんのほうを
むいてさっきの女子のことで何か冗談じょうだんでも言ってみよう
かと思っただけけれど、そんな雰囲気かみいきではまったくなかっ
た。

隣に座った麦くんは、本当にまいているみたいだっ
た。さらにくわしく話をきいてみると、それは夏休みが終
わってすぐの出来事だったらしい。あの女の子が本当に麦

くんのことを好きなのかどうか、それはわたしにはわから
ないけれど、でもやりかたがひどかった。本当の気持ちか
どうであれ、麦くんがほかの男子にくらべて大人しいこと
をわかっていて、あの女子たちはほとんどいやがらせみた
いに麦くんを狙ねらって、あんなむちゃくちゃなことを言っ
きたのだ。

わたしはだんだんさっきの女子たちにはつきり腹がたっ
てきた。そんなつもりはいっさいないとはつきり言っ
ればいい、とか、ぜんぶきちんと言い返して、むこうがま
ちがっているってことをはつきりとわからせてやればい
い、とか、頭のなかにはいろいろな強い言葉がつきつきに
浮うかんできたけれど、麦くんをみていると、それらは声に
なるまえに、するするとしぼんでいった。

何も言うことができなかった。麦くんには、元気がな
かった。風邪かぜをひいて熱がある人みたいに、ぐったりし
て、体のなかにその人の元気を奪うばってゆくものがいっぱい
につまんでいるのが隣にいてだけで伝わってくるのだっ
た。

公園の時計をみると、四時半だった。小さな子たちが少
し離れたところにある砂場で遊んでいるのがみえた。さっ

きとはちがうサイレンの音が遠くで鳴っているのが聞こえた。さっきのはパトカーで、これは救急車の音だとわたしはぼんやり思った。

「こんなことが」

麦くんがぼつりと言った。

【F】「こんなことが、これからはだんだんふえてくるんだらうか。」

「こんなことって？」

よくわからないけど、こういう気持ちになってしまいうなことが。

わたしは麦くんとおなじようにうつむいて、自分のスニーカーのつまさをじっとみつめた。

来年は、再来年は、もっと人がふえて、もっともつといろんな人がいろんなことを言うようになって、そして、うまく答えられないことばかりになって、どうしようもない難しいことが、これからどんどんふえていくんだらうか。

か。

ちょっと迷ってから、そうかもしれない、とわたしは言った。

でも、こつちも強くなるからさ。こつちもただ困ってるだけじゃなくなるし、黙ってるだけじゃなくなるし、なんていうのか、動けるようになるんだからさ。

動けるようになる？

「そうだよ、とわたしは言った。」

難しいこととかさ、いやなこととかさ、それはもういろんなことがわあつてふえてくるんだらうけどさ、でもこつちだって、そうじゃないところに自分でさつといけるようになるんだよきつと。自分で決めて、自分のちからで。」

麦くんは黙っていた。

（川上未映子『あこがれ』による。なお、問題文の一部を省略している。）

問一 ——線部A「その女子の言い方にかちんときたので」とあるが、わたしはなぜ「かちんときた」のか。その理由を説明しなさい。

問二 B に入る最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 怒り^{いか}で殴り^{なぐ}かかる イ 笑みが思わずこぼれる ウ 大声で叫^{さけ}んでしまう エ 恐怖^{きょうふ}で背筋^{こしお}が凍りつく

問三 ——線部C「そのことにわたしは衝撃をうけていた」とあるが、「そのこと」が指す内容を明らかにしたうえで、わたしが衝撃を受けた理由をわかりやすく説明しなさい。

問四 ——線部D「付きあうっていうのは、その、付きあってるんだ、ってことだけでいいの」とあるが、わたしは麦くんのように問いかけることで、彼に何を伝えようとしているのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 ——線部E「さっきの女子のことで何か冗談でも言ってみようかと思ったのだけだ」とあるが、このときわたしがそうしてみようかと思った理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 麦くんの子どもじみたお付き合いを笑わずにはられないので、冗談を言って麦くんを軽く茶化して笑いとばそうとするため。

イ 麦くんがどうすればいいかわからずどんどん暗くなっているので、冗談を言って麦くんを少し軽い気持ちにしてあげるため。

ウ 麦くんの気持ちかわたしから離れようとしていることに気づき、冗談を言って自分のみじめな思いを紛^{まぎ}らわせようとするため。

エ 麦くんを追いつめすぎたことに気づいたが素直に謝れないので、冗談を言って自分がやりすぎたことをごまかそうとするため。

問六 作者はこの物語の――部①「リーダーみたいな女子」、②「もうひとりの女子」、③「三人目の女子」をどのように描き分けているか。それぞれの人物の行動や発言に注目しながら、違いがわかるように説明しなさい。

問七 【 】でくくったFの部分は、わたしが今回の出来事に対する悔いを通して、大人になっていく自分への「覚悟」を感じ始める場面である。わたしは「どのような未来」に向けて、「どのような覚悟」を感じ始めているか、七十五字以内にとめて説明しなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人と人とのあいだには、「A」があります。「いい、悪い」ではなく、あたりまえのことです。

こどもの頃だと、「自分とは違った人」や、「自分とはぜんぜん違う人」と会うことが、そんなにも多くはありません。でも、大人になると違います。「ぜんぜん知らない人と話をする」というのは、大人にとってはあたりまえのことです。こどもだって、「ぜんぜん知らない人」と話すことはあります。そして、ちゃんと話せなくても、「こどもだからまあいいや」と許されてしまいます。

十代のはじめというのは、こどもから大人へと移って行く時期です。だから、この時期には、「知らない人とちゃんと話す」ということを、マスターできるようにしなければなりません。^Bそれをしないと、大人になってから、「人間関係が嫌い」と言っつて、人と話せなくなってしまう。

話相手がみんな「よく知っている友だち」だったら、タメ口でもかまいません。でも、そうじゃない人はいくらでもあります。つまり、「距離のある人」です。そういう人と話す時には、「丁寧の敬語」を使います。

「1」、あなたが一人で道を歩いています。知らない人に、「すみません」と声をかけられました。あなたは、「なんだ？」と思いました。

あなたが「なんだ？」と思っつて黙っていると、その人は道を聞いてきました。聞かれてもあなたには、道がよくわかりません。「どこなんだ、それは？」と、一人で考えます。考えてもわからないので、あなたは首を振るか、首をひねるかしました。

相手は、あなたが道を知らないらしいことをわかつて、「どうも」と言っつて去っつて行きました。

あなたは、べつに、悪いことをしていません。でも、去っつて行っつた人は、こう思っつてもしれません。

「今の子っつて、ほんとにぶあいさうで気味が悪い」
あなたには、言っつべきことが二つありました。ひとつは、「なんですか？」です。もうひとつは、「知りません」です。あなたは、それを悪意があっつて言わなかつつたわけじゃありません。ただ、「なんだ？」と思っつていて、「なんですか？」と言っつたのを忘れただけです。なにも言わず黙っつていて、それを通っつてしまっつたものだから、「知りません」と言っつたのも、うっつかりやめてしまっつたのです。

〔2〕、道を聞いた相手の人にしてみれば、「どうしてこの子は、かんたんなことさえも言わないのだろうか?」です。だから、「アブナイ子かもしれない」と思うのです。

あなたが「なんですか?」と言わなかった理由は、ほんとは、ただぼんやりしていただけかもしれません。でも、もしかしたらあなたは、「こういう時にはなんと言えばカッコがつくのだろうか?」と考えていて、その答が見つからなかったのかもしれませんが。「なんですか?」と「知りません」は、小学生でも言えます。もしかしたらあなたは、小学生の時には、そういうふうに言っていたかもしれません。でも、もう小学生じゃないあなたは、「いつまでも小学生みたいな言い方をしたくないしな」と思って、「なんか違う言い方ないか?」と思ったのです。

違う言い方を考えて、それが見つからないから、しかたなしに黙っていたのです。

黙っていると、「普通ふつうの人間ならかんたんに言えることを言わない、アブナイ子」になってしまうかもしれません。

「知らない人との話し方」を知らないで、「どう言うんだっけ?」と思ううちに、「言うべきことを言わないアブナイ子」になる方向へ進んでしまいます。その責任は、半分

あなたにあります。

あるいはまた、「なんですか?」と言わないあなたは、そのかわりに、「なに?」とか、「なんだよ?」と言ったとします。

「なんですか?」と言える小学生だったあなたは、「自分は何もかもじゃないから、そんな言い方したら恥はずかしい」と思って、「なに?」とか、「なんだよ?」というタメ口をきいたのです。「自分はもうこともじゃない。大人だ。だから、道を聞いた大人とも対等になる」と思ったのです。

そうなるとうなりますか? 相手はきくと、「今の子はキレやすいから危険だ」なんて思うでしょうね。

知らない人からいきなりタメ口で話しかけられる立場に、自分を置いてごらん下さい。それは、「C」と同じなんですよ。

タメ口には、敬語がありません。敬語がなくてもいいのは、「親しい人間との会話」と、「目上の人間が目下の人間にものを言う時」だけです。つまり、「もうこともじゃない」と思ったあなたは、知らない大人にタメ口をきいて、「大人より自分はえらい。私を尊敬せよ」という立場に立ってしまったんですね。

「大人に対する不満」があなたの中にあつて、そんなタメ口をきいてしまったら、「危険な子」というレッテルを貼られてしまう可能性があります。その責任は、半分以上あなたにあります。「それでもいい」と思っていると、社会の中で孤立してしまふ可能性があります。

「なんですか」と「知りません」は、ただの「丁寧」です。「相手はぜんぜん知らない人で、相手と自分とのあいだには、とても距離がある」という状況だから、その「距離」をはつきりさせるためには、「丁寧の敬語」を使えばいいのです。それは、「あんたが好きだ」ということとは関係ありません。また、「丁寧の敬語」は、「どっちのランクが上か」ということとも、関係がありません。好きとか嫌いとは関係なくて、ただ、「その人との間には距離がある」というだけなのです。

そして、注意しなければならないのは、タメ口には、「もうひとつの使い方がある」ということです。それは、「ひとりごと」です。相手のいないひとりごとには、敬語なんか必要がありません。だから、タメ口は「ひとりごとの言葉」でもあります。仲のいいともだちなら「敬語なし」でもいいし、ひとりごとにも敬語はいりません。でも、あま

り仲のよくないともだちや、ぜんぜん知らない人を相手にして、このタメ口を使ったらどうなるでしょう？ 怒りやすい相手なら、「なめるんじゃねエ！」と言って怒るでしょう。そうじゃない人になら、「この人は、なにを言っているんだろう？」と、ふしぎに思われるかもしれません。なぜかといえば、あなたの言っていることが、「声に出して言うひとりごと」にしか聞こえないからです。

タメ口は、「ひとりごとの言葉」でもあるのですから、そんなに親しくない人相手にタメ口を使ったら、「声に出してひとりごとを言っている」とおなじことになってしまうのです。

その状態をそのままにしておいたらどうなるでしょう？ あなたは、どこへ行っても「声に出してひとりごとを言っているふしぎな人」になってしまうでしょう。あなたにはそのつもりがなくて、ちゃんと人に話をしているつもりでも、あなたが敬語を知らなくて、タメ口しか使えなかったら、あなたは知らないあいだに、「他人を無視してひとりごとを言っているだけの人」になってしまうのです。

(中略)

人と人との間には、いろんな距離があります。近くても

「距離」で、遠くても「距離」です。だから、「距離があるからいやだ」と考えるのではなく、「その距離をどうするか？」と考えるのです。

いちばん近い人には、「距離」がなくてもいいような「ひとりごとの言葉」——タメ口でもだいじょうぶです。「ちょっと距離があるな」と思ったら、「丁寧の敬語」です。「ちょっと」どころではなく、「すごく距離があるな」と思って、それが「丁寧の敬語では役にたたないくらい遠い」と思って

しまったら、「尊敬の敬語」や「謙讓けんじょうの敬語」を使います。現代での敬語は、そのような使い方をするものなのです。

世の中にはいろんな人がいて、その人たちとの間には、それぞれ「いろんな距離」があるのです。だから、そういう世の中でちゃんと生きていって、自分の考えをつたえるためには、その人たちとちゃんと話がでるような、「敬語」^Gというものを知っておく必要があるのです。

(橋本治『ちゃんと話すための敬語の本』による)

問一 A にあてはまることばを文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問二 —— 線部B「それ」とは何を指しているのか、具体的に表している部分を文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問三 [1] ・ [2] にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ たとえば ウ ところが

問四

C

にあてはまる最もふさわしい言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 対等の立場に立つ

イ いきなり親しくなる

ウ 一方的にいばられる

エ 敵意を持たれている

問五

——線部D「レットルを貼られてしまう」とあるが、その意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 噂うわさが流されてしまうこと

イ 情報に支配されてしまうこと

ウ 激しい性格になってしまうこと

エ 勝手に決めつけられてしまうこと

問六

——線部E「怒りやすい相手なら、「なめるんじゃねエ!」と言って怒るでしょう」とあるが、何に対して怒るのか、説明しなさい。

問七 — 線部 F「タメ口は、「ひとりごとの言葉」でもある」とあるが、筆者が考える「タメ口」と「ひとりごと」の共通点とは何か。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 発する人と受け取る人の「仲」が良い点。
- イ 発する人と受け取る人の「距離」がない点。
- ウ 発する人が受け取る人を怒らせてしまう点。
- エ 発する人が受け取る人を不快にさせない点。

問八 — 線部 G「敬語」というものを知っておく必要がある」とあるが、それはなぜか。「距離」という言葉を用いて説明しなさい。

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 雲の様子から天気をヨソクする。
- ② 開園時間をエンチヨウする。
- ③ 水面に姿をウツしてみる。
- ④ メンミツな調査の結果が求められる。
- ⑤ 順調に会社のギョウセキをのばす。

